

# 考

## 東日本大震災を教訓として

も水が出ない。携帯電話も満足につながらない。1日の食事がおにぎりや菓子パンだけと話す女の子もいる。車の中で夜をあかす人もいれば、寒い体育館で毛布にくるまって眠る人もいる。

明日をも知れぬ避難所生活を余儀なくされ、いまだ収まらない余震に怯える毎日過ごす。そんな人たちが、何万人といることに思いをはせる必要はないだろうか。

自分の家族が行方不明になっているにも関わらず、懸命に捜索活動を続ける消防団員がテレビのイ

**決して当たり前じゃない「日常」**

朝、目が覚めてカーテンを開ける。顔を洗って歯を磨く。温かい朝ごはんを食べ、自家用車で出勤。一日の労働に汗を流す。仕事を終えて帰宅。「ただいま」「おかえり」。何気ない会話。子の笑顔。鼻をくすぐるみそ汁のおい。だんらんの夕食。一息ついたら温かい湯船につかる。居間に戻ってテレビ。ニュース、ドラマ、バラエティ。気が付くと、もう夜ふけ。「おやすみ」のあいさつを交わし、暖かい布団で眠りにつく……。

今、被災地の避難所では、こういった何気ない日常を送ることができない人が大勢いる。家がな。灯りがつかない。ガソリンが足りない。蛇口をひねって水が出ない。携帯電話も満足につながらない。1日の食事がおにぎりや菓子パンだけと話す女の子もいる。車の中で夜をあかす人もいれば、寒い体育館で毛布にくるまって眠る人もいる。

「私たちは誰よりも早く現場に入り、不明者の捜索を始めました。そして誰よりも長くこの場にどまり続けます。全ての人を見つけ出すまで、私たちはここを離れません」。自分のことは後回し。その毅然とした表情に、消防団としての決意と覚悟がにじみ出ている。いつまでもなく、消防団はボランティア組織だ。一人一人の団員は、それぞれが仕事を持ち、毎日に汗を流して働いている。しかしひとたび災害や火災が発生すれば、誰よりも早く現場に駆けつけ、被害の拡大を防ぐ。時には人命救助や不明者の捜索にも従事する。給料のためではない。すべては愛する人を、愛する古里を守りたいという義務感、使命感に支えられているから。郷土愛、人間愛にあふれ、地元を知り尽くした消防団だからこそ、できることがある。そんな共助の精神が、被災地の今を支えている。

### 想定を超える災害の恐ろしさ

災害は忘れた頃にやってくるという言葉がある。しかし近年では、阪神淡路大震災、新潟県中越沖地震、そして今回の東日本大震災と、「忘れる間もなく」やっけてきているのが現状だ。

静岡県では東海、東南海地震の発生が懸念され、それを想定した対策が進められてきた。しかし近

## 忘れる間もないほど頻発する大規模災害 一人一人の心構えが災害に強いまちをつくる



震災から約1カ月が経過した4月上旬、被災した各地から広報紙が届いた。そこには3・11の震災の悲惨さを伝えながらも、町民、消防団、行政などが互いに助け合い、復興への道を歩もうとする力強い姿が映し出されていた(左下から時計回りに、まちの総合情報誌ふじさわ、広報おいらせ、広報遠野、広報にのへ、広報ふだい、広報ひろの)。

年の大規模災害を見ると、人間が考える「想定」がいかに甘いものかと思わざるを得ない。

防波堤を乗り越え、家や車を飲み込んでいく津波。建屋の頭が吹き飛び、骨組みだけになった原発橋が落ち、孤立してしまった原発つもの集落……。これまでの想定では足りない。今一度、「災害の恐ろしさ」を考え直す必要がある。

たとえばマグニチュード9.0という地震が発生した場合、誰があなたを守るだろうか。行政、消防署、警察署、自衛隊、消防団！果たしてそれらは機能しているだろうか。いくつもの市町村が被災している状態で、すぐに助けに来られるだろうか。

地域に密着した消防団は、住民に一番近い防災機関。地域防災の要として、最も頼りになる存在だ。しかし、想定を超える大災害に襲われた場合、消防団を構成する団員一人一人すら被災者となってし

まうことを忘れてはならない。

**被害を最小限に食い止めるため**

「今この瞬間、地震が発生したら、私はどう行動すべきか」。消防団員だけではない。住民一人一人が、常に災害を意識することが必要だ。発生の瞬間、自宅にいたとは限らない。職場、学校、散歩、買い物……。その時、どう行動し、どこに避難するか。家族が離ればなれになった時の集合場所はどこにするかなど、さまざまなケースを想定し、家庭で話し合う機会を持つてほしい。

同時に家屋・家具の耐震化を図り、持ち出し品の補充も進めよう。近隣の人たち同士で助け合うためには、普段からの近所づきあいや自治会活動への参加なども大切な要素となるだろう。

一つ一つは小さな行動かもしれない。でも、そういった日頃の心構えが万一の時、パニックを軽減し、被害を最小限に食い止める最良の手段となる。

東日本大震災。発生から2カ月近く経過した今も、被害の全容は明らかにってはいない。しかし、被災地の人々は力強い。助け合いながら、支え合いながら、復興への道を模索し始めている。

心を痛めてばかりはいられない。明日をも知れぬ大規模災害に備えるため、私たちは、この災害から多くを学ばなければならない。



## 地域を守り抜く使命感

東日本大震災を教訓とした、本町消防団や関係防災機関の心構え

### 被災地では献身的な活動を続ける消防団員の姿がある 我々も一丸となって災害に立ち向かう消防団でありたい

**東**日本大震災で被害に遭われた東北、関東の方たちに、謹んで哀悼の意を表します。一日も早い復旧、そして復興を祈っています。

津波被害の甚大さや福島原発への不安など、現地の模様が毎日のように報道されていますが、まだまだ今回の震災による被害の全容は明らかになっていません。しかしそんな凄惨な状況下にあっても、メディアからは連日、献身的に不明者の捜索や復旧作業に汗を流す地元消防団の様子が伝わってきています。

**本**町で大災害が起こった場合、津波被害の不安はないものの、点在する集落が多いため、道路の寸断

によって、いくつもの集落が孤立する可能性があります。東日本大震災でも、そういった孤立集落の様子が伝わってきており、決して他人ごとではないと痛感させられます。

**こ**の大震災は、人々の想像をはるかに超える被害をもたらしました。我々は心を痛めるだけではなく、「教訓」とする必要があります。将来、東海地震など大規模災害に見舞われた時、団員一人一人には何ができるのか。平日頃から意識して暮らしてほしい。自分が住む地域は、自分たちで守るという強い意識を持ち、団員一丸となって災害に立ち向かう消防団でありたいと考えます。



川根本町消防団 ともよし 高田智祥 団長



島田警察署 柴行延 署長

### 連携を密にした防災活動

**日**頃は本来の業務を持ちながら、奉仕の精神で、地域の防災に活躍している消防団の皆さん。その活動はとすれば危険が伴うものですが、「地域の安全を守る」という高い志を持ち精進を重ねるその姿は、本当に立派であり、貴いものです。防災のなかめである消防団、消防署、そして私たち警察署などが、今後より一層連携を密にして、迅速・的確な防災活動を展開していけたらと考えています。



金谷消防署 杉山正美 署長

### 手を携え災害防ぐ努力を

**被**災地では今も住民の避難所生活が続いています。災害とは、発生したその時だけをいうのではなく、復旧するまで続いていくもの。東海地震への不安も高まっている中、自らの地域は自らの手で守るという姿勢が最も大切です。今後も高い意識と団の伝統を受け継ぎ、一致団結して防災活動に当たってください。消防本部としても、消防団の皆さんと手を携え、災害のないまちづくりを進める努力を続けていきます。

### 23年度入退団者紹介 (敬称略)

**退団者:**安江明彦、中野裕文、岩田尚也、中田まり、望月秀俊、松下雅光、竹野克彦、山下富士夫、小倉一孝、中田敏彦、中山幸久、杉本裕志、西田稔、鈴木隆三、望月浩之、渥美真吾、大下亮、澤本英季、坂口栄之、渡辺晴彦、小澤康人、松下伸介、小坂純、森下孝之、森下真司、名波治彦、気田房利、前田善啓 28人

**新入団員:**第1分団▶大森義久 第3分団▶勝山恭弘、鈴木直樹 第4分団▶土居洋司 第5分団▶中澤太加也、青木慶彦、坂野正記、山本尚樹 第6分団▶松本悠紀、西田隼人、瀧澤創、前田雅也、太田将宏 第7分団▶柳原俊希 第8分団▶高木英樹、栗原悠 16人

